ノヴゴロド第一年代記シノダリ本における古代スラヴ語要素について[1]

はじめに

中世ロシア研究については、例えば木村彰一教授、石戸谷重郎教授、國本哲男教授などの業績にみられるように、散発的ながら夙にその研究が行われていた。

京都を中心とする古代ロシア研究会も、1962年に創刊号を発行して以来、緩りとではあったが、着実に号を重ね、現在の第14号に至っている。この間、たとえば中村喜和教授による、ロシア中世文学の翻訳と研究などもみられ、我国におけるロシア中世の研究の気運が漸やく動きつつあることは、斯学の発展のために真に喜びに堪えない。

このような状況を反映してか、古代ロシア研究会を中心とする若干のメンバーが申請していた科学研究助成金が、今1982年度一部認められたことは、非常に喜ばしいことであり、一同感謝しているところである。この論文も、この成果の一つに外ならない。

I. 問題の所在

1. 古代スラヴ語

§1　中世ノヴゴロドの言語という場合、まず、当時の大まかな言語状況を知っておかなくてはならない。そしてそのためには、先ず古教会スラヴ語、乃至は古代スラヴ語について述べておくことが、必要となる。

スラヴ世界に文字が伝来したのは、キリスト教の弘通と同時であった。これはサロニカ出身のコンスタチノス(キリロス)とメトディオスというギリシャ人の二人の兄弟が、当時のスラヴ人の大帝国であった大モラヴィア帝国の求めに応じて、聖書を翻訳すべく文字を創ったのがそのはじまりと伝えられている。兄弟がはじめてこの文字により聖書を翻訳したのは、862 ～ 863年であるといわれる。

このために使用せられた言語は、サロニカで行われていたスラヴ語であった。当時のサロニカはギリシア語とスラヴ語の二言語併用地域であり、コンスタンチノス兄弟が選ばれたのも、彼等の学殖のみならず彼等がこれら二つの言語に精通していたが為であった。

この地域は、現在ブルガリアの一地方であり、マケドニア語が行われている。従ってその言語も、南スラヴ語の特徴を既に備えていたが、その分化の程度は未ださほど著るしくはなく、なおスラヴ世界全体にとって理解可能なものであった。

キリル、メトディオス、及びその直接の後継者たちが用いた言語を、我々は「古教会スラヴ語」 Altkirchenslavisch, древнецерковнославянский язык あるいは「古代スラ

[1]昭和52(1982)年度科学研究費 総合研究(A)研究成果報告書『中世ノヴゴロドの言語と文化』　17–42頁。

ヴ語」Altslavisch, vieux slave, старославянский язык とも称されている。これはまたその故地に因んで「古代ブルガリア語」Altburgarisch, древнеболгарскйи язык とも称される。ブルガリアでは特にこの呼称が好まれているようである。

2. 教会スラヴ語

§2　前節で述べたように、古代スラヴ語はスラヴ世界の全体に理解され、通用し得るほどに未だ諸方言が未分化であった時期に、聖典の言語として成立したものであるから、恰も中世ヨーロッパにおけるラテン語のように、これが教会の用語として用いられるようになったのも、自然の成行きであった。

しかしながらスラヴ語の諸方言の分化が漸やく顕著になって来るにつれて、古代スラヴ語がそれぞれの地方の口語の影響を多少とも蒙るようになったのもまた、当然のことであった。

このような言語を我々は「教会スラヴ語」Kirchenslavisch, slavon, церковнославянский язык と名付け、これを古代スラヴ語から区別するのである。このような教会スラヴ語はもとよりそれが行われる地方によって異なるから、たとえば A. Vaillant のように、地方の名をそれぞれに冠して、「ロシア教会スラヴ語」slavon russe、「モラヴィア教会スラヴ語」slavon morave、「セルボ・クロアチア教会スラヴ語」slavon serbocroate のようにすべきであるという学者もある。

何れにせよ本稿で扱うのは、「ロシア教会スラヴ語」церковнославянский язык русской редакции である。

ところで古代スラヴ語と教会スラヴ語を上述のように規定すれば、両者の境界をどこに置くかが問題となろう。何故なら「教会スラヴ語」は、当初用いられていた「古代スラヴ語」が、使用されているうちに無意識に地方的差異を示すに至った結果であって、両者は一の連続体をなすと考えられるからである。

しかしそのような議論は別として、一応「古代スラヴ語」を、9世紀から10世紀の初頭にかけて、キリル、メトディオス及びその直接の後継者達の手になると考えられている文献の言語に限定するのが、一応の慣行となっている。

3. 古代ロシア語

§3　スラヴ諸語の共通の源として想定される「スラヴ祖語」Urslavisch, праславянский язык 又は「スラヴ共通語」Slave commun, общеславянский язык は、やがて東スラヴ語、南スラヴ語、西スラヴ語に分化し、東スラヴ語は更に「大ロシア語」великорусский язык、「白ロシア語」белорусский язык および「ウクライナ語」украйнский язык に分たれる。

これらの現代の諸言語の特徴は、すでに早くから見られるが、その分化が著るしくなる16世紀頃までの言語を、通常「古代ロシア語」 древнерусский язык と謂うのである。

学者によっては、更に分化後の古層の言語を「古ロシア語」старорусский язык と呼び、「古代ロシア語」と区別する者もある。この場合「古ロシア語」は「古白ロシア語」старобелосусский язык 及び「古ウクライナ語」староукрайнский язык と同列の概念となる。

ノヴゴロド第一年代記の言語は、西北部の方言的特徴を含む古代ロシア語であり、従ってここで問題とするのも、この言語に関してである。

4. ロシア文章語の成立基盤

§4　ロシアにおいては10世紀の終り、キエフのヴラヂミル聖公によって、キリスト教への改宗が行われるが、これと関連してキリル文字による古代スラヴ文献が渡来したとされていた。しかし、アルツィホフスキー A. B. Арциховский を団長とするノヴゴロド発掘隊が1949年以降発見した、いわゆる「ノヴゴロド白樺文書」Новгородские берестяные грамоты によって、民衆の間には、それ以前からキリル文字が知られ、広汎に用いられていることが判明した。

これは白樺の皮にスティロス様のもので掻くことによって書かれたものであって、内容は、夫から妻への手紙のような私信、手代の書き付け、文字の手習いなど、庶民の生活に密着したものである。

§5　一方ロシア文章語の成立については、従来から、いくつかの見解が知られていた。その一つは、古代スラヴ語基底説である。たとえばシャフマトフ A. A. Шахматов は次のように言う。

「ロシア文章語はその発生において、ロシアの生きた土壌に移された教会スラヴ(発生時には古代ブルガリア)語であって、何世紀もの間に生きた民衆語に近づき、やがてその外来の輪郭を失い、また失いつつある言語であり」、「その発生において、漸次ロシア化した教会言語であって、その逆、すなわち教会の影響を蒙ったロシアの生きたことばではない」[2]。

ボドウェン・デ・クルテネ[3] あるいはイストリン[4] などの学者も、皆古代スラヴ語基底説をとっている。ソボレフスキーも古代スラヴ語基底説に立っているが、文章語と並んで生きた事務用言語が存在することをみとめている[5]。

§6　このようなシャフマトフに代表される古代スラヴ語基底説に対して、ロシア語基底

---

[2] *Очерк современного русского литературного языка*, изд. 4, М. 1941, стр. 60.

[3] И. А. Бодуэн де Куртенэ, *Избранные работы по общему языкознанию*, т. 2, М. АН СССР 1963, стр. 91.

[4] В. М. Истрин, *Очерки истории древнерусской литературы домосковского периода*, Пг. 1922, стр. 65.

[5] А. И. Соболевский, *Ломоносов в истории русского языка*, СПб. 1911, стр. 1 etc.

説を提唱したのが、オブノルスキーであった。彼は「ルス法典」、「モノマフ庭訓」、「ラヴレンチー本原初年代記」、「イーゴリ公征旅の歌」等の言語を研究し、その上に立ってこれ等の文献がすべて「一次的に形成された、ロシア語を基礎とし、一定の歴史的瞬間にブルガリア文章語と接触することにょって、その特性を漸次吸収し、特に語彙、成句を豊富にして、その新たな要素を文学作品そのものに適応させて種々に使い分けるに至った言語」によって書かれていると主張する[6]。

古代スラヴ語との接触は従って二次的な、比較的後のことであるというのである。

これに対しては、たとえばゴルシコフの批判がある。

要約すれば、その第 1 は、古代スラヴ語のキエフへの流入時代以前に、古代ロシア語で書かれた文献が知られていないこと、第 2 にオブノルスキーの主な論拠となっているルス法典が文学作品でなく、他の作品の言語もまた、純粋なロシア民衆語で書かれたと立証することがむずかしいこと、である。

第 3 点は、古代ロシア文章語の成立と発展の全貌を、わずか四つの文献のみに基いて判断することができないことであり、また第 4 点として、オブノルスキーが比較的時代の降った文献に基いて議論を行い、たとえば「1076年の文集」や、「ボリス・グレーブ伝説」、「ペチェルスキーのフェオドシィ伝」のような最も古い文献を無視していることである[7]。

§7　ヴィノグラードフは、これらの所説に対して、第三の折衷的な見解を提出した。

これによれば、宗教、科学、高雅な文学などには、ロシア語に適応した古代スラヴ語が用いられ、これに基いて「古代ロシア文章語のスラヴ・タイプ」книжно-славянский тип древнерусского литературного языка が成立するが、一方これと並行して民衆の口語に基礎をおいた「文章語化した民衆タイプ」литературно-обработанный народный тип древнерусского литературного языка が存在していた、というのである[8]。

ここで古代スラヴ語的なものと、民衆語的性格の強いものとをそれぞれタイプと呼び、共に古代ロシア文章「語」の下位区分としているのは、苦心の存するところであると言えようが、これは同時に「同一の言語の二つのタイプが異った言語的基盤をもつという主張には疑いを生じない訳にはいかない」とするゴルシコフの正当な批判をも、可能にしている[9]。

§8　エフィーモフは、「キエフにおいて特殊なコイネー、即ち語彙の組成、文法構造及

---

[6] С. П. Обнорский, *Очерк по истории русского литературного языка старшего периода*, АН СССР М.-Л. 1946, стр. 79.

[7] А. Н. Горшков, *История русского литературного языка*, М. 1969, стр. 29–30.

[8] В. В. Виноградов, *Основные проблемы изучения образования и развития древнерусского литературного языка*, М. 1958, стр. 37–38.

[9] *op. cit.*, p. 31.

び発音の基準についての方言的特徴が払拭、平準化された唯一の共通語が形成された」とし、チェルヌィフに従って「まさにこの言語を基礎として9～10世紀のあいだに、即ちルシの公的な洗礼に先行する時期に、ロシア文章語が成立していた」という[10]。そしてこの言語とスラヴ世界の共通語であった古代スラヴ語が相互に作用して、多くの文体を含む単一の言語ができたというのである。

この種のコイネーの成立については、ゴルシコフも言及しているが、彼はこれが日常的な使用のみに局限せられていたのではなく、政治、法律、演説などにも使用されていたと主張している。

§9　このようにロシア文章語の成立については、それに参与する二つの言語の関係をめぐって、諸家の説は微妙に異っているが、この時代の文献を瞥見すれば、二つの言語であるか二つの文体であるかは別として、二つの核が並存していたことは、間違いがないと思われる。

ゴルシコフは、ヴィノグラードフの所説について、彼が強調しているのは、「古代ロシア文章語の最も著るしい特徴をなすのが、古代スラヴの要素とロシアの要素の構造と体系における相互作用と相互滲透だというだけでなく、この相互作用と相互滲透が、古代スラヴ語と古代ロシア語の中間を成し、文化生活のすべての領域に等しく奉仕し、すべての種類の文献に等しく使用されるような言語をもたらさなかったことである」(*op. cit.*, p.31)と述べている。

このような状況が可能なのは、古代スラヴ語要素とロシア語要素が、独自の機能を保持している時でなければならない。フィリンはこの点について、「本来のロシア文章語における古代スラヴ語要素は、きわめてしばしば決して機械的に用いられていた訳ではないがそれらは一定の意味的負荷を以って、ロシア語の話の体系に有機的に包含され、それを豊かにしたのである」[11] と述べている。

§10　このような文体の機能については、これが現代の文体の概念と異って、内容あるいはジャンルと結びついたものであるというのが、一般的な見解であるように思われる。たとえばエフィーモフは、「これらの文体の相互作用と、その発展の一般的な条件は、同一の作者が文献の内容に従って、ある場合には古代スラヴ語の要素を、またある場合には古代ロシア語の要素を活性化させるという点にあらわれる」[12] と述べている。

またフィリンは、「古代ロシアの作家達は、自己の創作において他の資料 — 古代スラヴ語 — を用いる。このことによってヴラヂミル・モノマフの作品、「囚人ダニイルの祈り」、

---

[10] А. И. Ефимов, *История русского литературного языка*, изд. 3, М. 1971, стр. 26. 及び П. Я. Черных, *Происхождение руссского литературуного языка и письма*, М. 1950, стр. 25.

[11] Е. Ф. Ковалевская, *История русского литературного языка*, М. 1978, стр. 47.

[12] А. И. Ефимов, *op. cit.*, p. 27.

「イーゴリ公征旅の歌」のような作品に、古代スラヴ語要素の層の著るしい存在が説明できる」[13] という。

すなわち、これらの説に従えば、当時の文体は、描く内容、ジャンルに従って変化するいわば「客観的」文体であって、書き手が一定の効果をあげようとして用いる「主観的」な文体ではないということになる。これはいわゆる雅文体、中文体、卑文体の別を立て、これを文学のジャンルに配当したロモノソフの三文体説を想起させるものである。

しかしそう言ってよいものかどうかは，実際の文献に徴して決定されねばならないと思われる。

5. ノヴゴロドの言語

§11　ノヴゴロドは、古くからハンザ同盟諸都市など、いわゆる「ゴート沿岸」との交易によって栄え、発達した手工業をもつ都市国家であった。キエフを中心としたロシア古代国家、いわゆるキエフ・ルーシの諸候もノヴゴロドを重視し、その長子をノヴゴロドの公に封ずるのが常であった。やがて力を蓄えたノヴゴロドは、漸次独立性を強め、手工業の職人をもその成員として含む民会によって政が決定される、特異な封建的共和政体をとるに至った。

このような自由な都市生活をもつノヴゴロドにおいて、キエフにおけると同様のコイネーが早くに成立したであろうことは、当然予想されるところである。また政治、経済、法律その他の各分野にわたって、実用的な言語が必要ともされていた。庶民の日常生活にまで文字の知識が普及していたことは、夥しく出土している白樺文書に徴しても明らかである。

このような背景の上に、ノヴゴロド年代記が書かれているのであるから、その言語の研究は上述したようなロシア文章語の成立の事情を解明する上で、極めて重要な位置を占めると考えられる。

就中ノヴゴロド第一年代記シノダリ本(宗務院本)は、最も古い写本によって伝えられ、キエフにおいて成立した原初年代記と比較すれば、文法、音韻などにおける歪曲ももっとも少ないことから、重要な文献であるといえる。

II. 古代スラヴ語要素

§12　古代スラヴ語と古代ロシア語は極めて近い同系の言語であるから、例えば日本語における漢語とやまとことばのような、截然とした区別はない。

しかし音韻面で相異なる場合には、両者の区別は比較的明瞭である。

たとえば東スラヴ語に特有の、いわゆる母音重挿 полногласие (佐々木秀夫教授の訳

[13] Е. Ф. Ковалевская, *op. cit.* p. 47.

語) を伴っている場合などがこれに当る。すなわち印欧語のソナント *r 及び *l と結んだ二重母音 *ar, *al, *er, *el 等は、古代スラヴ語の属する南スラヴ諸語及び西スラヴ諸語では、転置 metathesis を蒙ってそれぞれ pa, pЬ, ла, лЬ のようになるのに対して、ロシア語の属する東スラヴ諸語においては、oро, ере, оло, оло のような形で現われるのである。

印欧語	古ス	古ロ
*ar, *or	pa	oро
*er	pЬ	ере
*al, *ol	ла	оло
*el	лЬ	оло

例

*bard-「ひげ」брада/борода́

*korv-「雌牛」крава/коро́ва

*derv-「木」дрЬво/де́рево

*k̂alm-「わら」слама/соло́ма

*ĝolt-「金」злато/зо́лото

*melk-「乳」млЬко/молоко́

§13　印欧語の語頭の *ar-, *or-. *al-, *ol- が下降調のイントネーションをもつとき、南スラヴ語では pa-, ла となるが、西スラヴ及び東スラヴ諸語では、po-, ло- となっている。これに対し上昇調のイントネーションをもつときは、すべてのスラヴ語にわたって、pa-, ла- となる。

印欧語	古ス	古ロ
*ar̃-, *or̃-	pa-	po-
*al̃, *ol̃-	ла-	ло-
*ár-, *ór-	pa-	pa-
*ál-, *ól-	ла-	ла-

例

*aŕb-「働く」 работа/*робота

*aŕd-「船」 ладии/лодь

*ár-「耕す」 pа́ло「鍬」

*ál̥k-「飢える」 ла́кати「渇望する」

§14　印欧語の *tj, *dj は古代スラヴ語では щ, жд ロシア語では ч, ж となる。
たとえば、

*swoitjā　свеща/свеча

*gardjānin　гражданин/горожанин

また *ktj も古代スラヴ語では щ、ロシア語では ч になった。
たとえば、

*noktis　нощь/ночь

以上のような、音韻的に明白な形は持っていないが、たとえばロシア語の грудь「胸」、палец「指」、рот「口」に対して、古代スラヴ語では перси, персть, уста が対応するというように、相異なる語彙をもって対応する場合がある。

III. 本　論

1. 文　献

§15　底本としたのは Академия Наук СССР, Институт истории, *Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*, М.-Л. 1950 所収の Синодальный список である。これは 37 帖からなり、1 帖はそれぞれ羊皮紙 8 枚から成っていたが、最初の 16 帖 128 枚は失われている。また残りのもののうち、2 帖は各 1 枚が切りとられており、全体の末尾に 3 枚の羊皮紙が綴じ込まれている。したがって現存のものは、$(36-16)\times 8-2+3=169$ 枚の羊皮紙から成っている。最初から 123 頁 (62r) の中途まで、およびそこから 236 頁 (118v) 目までが、夫々 13 世紀の相異なる手蹟によって誌されている。更に 237 頁 (118v) から 332 頁 (166v) までが 14 世紀前半の手蹟によって書かれ、補足された 3 枚 6 頁は 14 世紀中頃の筆になるといわれる。

2. IE *er

§16　IE *er は、既に述べたように古代スラヴ語においては、metathesis によって rě(pь̑) に変化したが、古代ロシア語を含む東スラヴ諸語においては、更に母音重挿によって epe

となった、したがって年代記のテクスト中 pЬ の形を持つものは、古代スラヴ語起源の語であると考えることができる。

一方古代スラヴ語において rě の形をもつことから、IE の *er と rě との間に、中間段階として母音の延長 (おそらくはいわゆる代償延長 Kompensationsdehnung) を伴う *rē の存在することが推定される (同様にして *or, *ar > *or > *rō > ra etc.) がこの ě(ь) はロシア語の内部においてやがて e と混同されて現在に至る。

ノヴゴロド年代記シノダリ本にも、IE *er は pЬ と並んでしばしば pe の形であらわれている。

§17　シノダリ本において pЬ/pe の形をもってあらわれる語は、次のようなものである。

1. брЬгъ, брегъ 「岸」。 *cf.* 古高独 berg 「山」。

2. врЬмя, время 「時」。 IE *wertmen.

3. дрЬво 「木」。 IE *derw-. *cf.* 希 δόρυ-, 梵 dāru-「木」, 英 tree.

4. среда 正しくは срЬда 「中央」「水曜日」。IE *k̂erdā. *cf.* ゴート haírtō 「心臓」。

5. прЬдъ, предъ, пред 「前に」。 IE *perd-「前」。

6. прЬже, преже 正しくは прЬжде 「より前」。 *perdi̯e, *perd- の比較級と推定される。*dj は古代スラヴ語では жд となる筈であり、ж は東スラヴ語の形である。古代ロシア語文献には、時としてこのような折衷形 hybrid forms がみられるが、これらも広い意味での古代スラヴ要素と考えるのが、至当であろう。

7. прЬднее, преднее「以前のこと」。5 項参照。

8. чрЬсъ 正しくは чрЬзъ「～を経て」。*kerts- > *čers- > *čerz-. この *s > *z の変化に、他の前綴 vŭz-, jĭz- 等の類推として説明される[14]。

9. прЬ-, пре-. IE *per. 古普 per「越えて」, 拉 per, リト peĩ 「通して」。

この前綴は、スラヴ語において広く用いられる。これはたとえば прЬити 「通りすぎる」のように、動詞と結んで通過、過剰などの意義をあらわすが、この場合には多く東スラヴ語形 пере- と競合する (*cf.* перейти)。従ってこの場合に、прЬ- の形を有する古代スラヴ語的性格は、殊に鮮明である。たとえばпрЬставити 「みまかる」は *переставити の形であらわれることがなく、 померети, умерети 「死ぬ」とは明確に異っている。

これに対して形容詞に附加されて、その表わす性質の優越的なことを示すために用いられる場合がある。たとえば прЬблагыи 「いと善き」、прЬчистыи 「いと清き」、

[14] *cf.* М. Фасмер, *Этимологический слобарь русского языка*, vol. IV.

прѣмилостивыи 「いと仁慈なる」のようなものである。こら等の場合には対応する東スラヴ語形は用いられない。またその接合する形容詞も、宗教的意味合いを濃くしているものが多い。

この外にたとえば прѣставление 「薨去」、прѣстолъ 「玉座」のように прѣ が名詞の構成要素として立つ場合にも、その名詞の意義は、明らかに世俗的なものとは異っている。

§18　以上の外、これに準ずるものとして срѣбро, сребро 「銀」がある。これは古代スラヴ語では сьребро あるいは съребро であり、ゴート silubr, 古高独 silabar 等にみられるように、共通スラヴ語の形としては *sĭrebro が考えられる。

しかし本来の e に代って срѣбро のように ѣ の使用されている例のあること、現代ロシア語で母音重挿を伴う形 серебро が一般化していること (сьребро́ の ь が強母音化して e となることは、アクセントの位置からみても考えられない。ь がいわゆる「弱い位置」にあり、従って脱落するのが一般的法則である。従って серебро の形が ь の強母音化の結果であるとする可能性は除外される) から推して、срѣбро 乃至 сребро の形がこの時代既に古代スラヴ語形として意識されていたと考えられる。

3. IE *a/or

§19　*a/or は古代スラヴ語では ra、東スラヴ語では oro となる。

しかしシノダリ本には ra の形をもつ語彙は、極めて散発的である。

1. влачити 「曳く」。*wolk-ī-tēi.
2. власъ 「髪」。*cf.* アヴェスタ *varəsa-「頭髪」。
3. врата 「門」。*wort-. *cf.* リト vartaĩ「扉」, アングロ・サクソン weorð, worð「庭」。
4. глава 「頭」。*golwa.
5. гладъ 「飢」。*gold. *cf.* 梵 gárdhas 「渇え」。
6. драгыи 「高価な」。*dorg-(?)
7. злато 「金」。*ĝholt. *cf.* ゴート gulþ, 梵 hiraṇyam 「金」。
8. младъ 「若い」。 *mold-. *cf.* 古普 maldai「若者」, 梵 mr̥dús 「柔い」, 拉 mollis < *moldvis 「柔い」。
9. мразъ 「寒気」。*morg-. *cf.* 古高独 murg-fari「脆い」, アルバ mardhem 「凍る」。

10. градъ 「町」。*gard-. リト gařdas「庭」, ゴート gards「家」。

11. оградити 「囲む」。前項参照。

12. смрадъ 「悪臭」。 *smord-(?). *cf.* смердѣти 「悪臭がする」(e 階梯)。

13. срамъ 「恥」。*sōrm-(?). アヴ fšarəma-「恥」, 古高独 har(a)m, ラトヴィア šermelis「怖れ」。

14. страна 「地方、国」。*stornā. *cf.* 梵 str̥nā́ti 「撒く」, stírnṇás 「敷かれたる」。

15. стража 「衛兵」。*storg-. *cf.* стерегу́ 「監視する」。

16. хранити 「保存する」。共ス *xraniti.

17. храбръ 「勇敢な」。 共ス *xorbrŭ.

18. храмъ 「家、神殿」。 共ス *xormŭ.

§20　これらの各語は、何れも母音重挿を伴う東スラヴ語形をもってもあらわれている。しかしこの中には、たとえば срамъ (13), хранити (16), храбръ (17) のように現代ロシア語では古スラヴ語形が定着しているものもある。またたとえば глава (4) が、現代ロシア語では「首領、章」、голова が「頭」のように、語義の分化を伴ってそれぞれ定着したものもある。同様の例としては страна 「国」、сторона 「方面」、храмъ 「神殿」、хоромъ 「家」などが挙げられる。

更にまた градъ (10), гладъ (5), злато (7) のように、現代ロシア語では主として詩語として用いられるものもある。

以上から、古代ロシア語形、東スラヴ語形の両様にあらわれうる語彙をみれば、現代ロシア語では、前者が雅語あるいは宗教的その他の、いわゆる学者語 mots savants として用いられているということができよう。

シノダリ本についてみれば、上掲の各語は未だ東スラヴ語形と並存している。比較的意義分化が進んでいるとみられる власть 「権力」と волость 「領土」についてみても、未だ前者が後者の意味で使用されている例がみられる。両者の相違が奈辺にあるかを探るのがこの小論の目的である。

§21　これに対してシノダリ本でも殆んど専ら古代スラヴ語形においてのみ現われる語がある。たとえば、

19. благъ「善い」「高貴な」。*bolg-(?).

20. възвратити「返す」, вратити「まわす」。 *wort-ī-tēi.

21. отвратити「そむける」。前項参照。

22. помрачение「暗くなること」, мракъ「闇」。 *mork-. *cf.* 古高独 morgan「朝」, リト mérkti「目を閉じる」。

4. IE *tj, *ktj

§22　印欧語の *tj, *ktj は古スラヴ語では št > šč (щ) に、東スラヴ語では č(ч) に変化した。

語彙のレヴェルでこの音韻をもつものを別にして、文法のレヴェルで考えれば、まず思い浮かぶのが、所謂被動形動詞 -щенъ の形であろう。

しかしシノダリ本でみる限り、被動形動詞の使用は極めて僅少である。しかもその使用は特定の文脈に限られているような印象を受ける。

即ち最も多いのは教会に関して浄めの式が行われたことをあらわす священъ, освященъ「浄められたる」の計 6 例、罪が許されることを示す прощенъ 1 例、神につかわされることを示す пущенъ 1 例あり、これ以外のものは пущенъ, спущенъ 各 1 例を数えるに過ぎないのである。たとえば、

1) Бъ то же лѣто **священа** бысть церкы святого Михила Переяславли. (5v9)
「この年ペレヤスラヴリにおいて、聖ミハイル教会が浄められた。」
類似: 5v10, 5v13, 154v10, 158r3。

2) **Освящена** бысть церкы святыя Богородиця Володимиромь　(2v4)
「ヴラヂミルによって聖母教会が浄められた。」

3) всѣх грѣх **прощен** будемъ　(125v8)
「我々はすべての罪から赦されるであろう。」

4) придохомъ богомъ **пущени** на холопы и на конюси свое на поганыя Половче　(97v4)
「我々は自分等の奴婢であり馬丁である、異教のポロヴェツ族に対して、神に遣わされて来たのである。」

以上からみて、被動形動詞過去形による回説的受動表現は、当時極めて稀であり、それ自身強い教会スラヴ語的性格を示していたと推測される。逆にこのことが、現代語において音韻 щ を、この種の語の語構成要素として保存させることになったと考えられるのである。

§23　被動形動詞過去形の外に、現代語でフォルマント щ をもつ文法形態は、能動形動詞 -щий であり、これは IE *e/ont-j- に来由している。

この場合にも東スラヴ語形では -чий となるが、ロシア語ではこの本来の語形をもつものは、例えば стоячий 「淀んだ」のように形容詞に転化している。

シノダリ本においては東スラヴ語形は、なお形動詞として一般に使用されており、щ の形は未だ全体からすれば散発的である。しかし被動形動詞過去形の場合とは異なり、語彙の散らばりも大きく、必ずしも宗教的な文脈にのみその使用が限られているという訳でもない。

東スラヴ語形の例としては、たとえば、

5) А на Ярослалихъ любъвницехъ поимаша новгородци кунъ много ... а дворовъ ихъ не **грабяче**, и даша на великыи мостъ. (108r10)
「ところでノヴゴロドの人々は、ヤロスラフの寵臣達から多くの金額をとり、.....一方彼等の邸を掠奪することはせずに、大橋の建設に(その金を)あてた。」

6) ... а на Суждаль **идуче**, не пустиша его ... (16r2)
「ところでスズダリに進攻しながら、(ノヴゴロドの)人々は彼(*sc.* 府主教)を行かせなかった。」

§24　前節で述べたように、щ を有する形が、宗教的な文脈にのみ使用されているということはないが、それにもかかわらず宗教的な文脈に使用されることが多いのも、また事実である。たとえば、

7) и поставиша архиепископа Нифонта, мужа свята и зѣло **боящася** бога (13r8)
「そこで人々は大主教に、神々しく、神をおそれることの深い人ニフォントを任命した。」

8) Но мы на злая възврашаемся (*sic*), акы свинья **валящеся** в калѣ грѣховнѣмь присно ... (125v9)
「しかし我々は永遠に罪の泥沼にもがく豚のように、悪に帰るのである。」

9) Колику богъ наведе на ны смерть тои весны, да то мы **видяще**, не разумѣхомъ своея погыбели (110r3)
「神が我々にどれほどの死をこの春もたらされたか、それを我々は知っていながら、自分が破滅することを悟らないのである。」

10) А оканьнии человѣци, такоже бога не **боящеся**, ни суда божия **помняще**, ни **жалующе** своея братья, пограбиша чюжая имѣния (157r11,

157v2)
「ところで呪われた者達は、このように神を惧れず、神の裁きも覚えず、自分達の兄弟達を憐れむこともせずに、他人の財産を掠めとったのである。」

能動形動詞現在形に関連して、いわゆる独立与格句 dativus absolutus の問題があるが、これについては後に述べる。

§25　щ を含む語の中には、印欧語の *sk' に来由するものがある。これはロシア語においても щ として現われ、従ってこの場合 щ は古代スラヴ語要素を特徴づける音韻であるということはできない。

たとえば вощаник 「蝋職人」 < *wosk-i̯ 「蝋」。 *cf.* リト vâškas, 高独 Wachs; ищу 「求める」< *isk-jōm。 *cf.* 梵 icchati, 古英 āscian; щитъ 「楯」 < *skito- 並びにこれと同根の щитник 「楯職人」、защищати 「護る」。 及び場所をあらわす接尾辞 -ище < *isk-jem。прибежище 「避難所」、Търговище 「トルゴヴィシチェ」(地名。本来は「商業区」)等、およびこの接尾辞を含む語。たとえば огнищанинъ 「家の主人」(本来は「火を焚く場所の人」); обнищати 「零落する」 < *nizk-i̯-。

*sk' の外、 сч > щ, *st' > щ も小数ながらみとめられる。たとえば бещисла 「無数」 < бес-числа 「数が無い」; бещьствовати 「卑める」 < бес-чьст-; пущьшь 「より悪い」 < *poust-i̯-。

§26　以上を除外したものは、たとえば次のような語である。

1) аще 「もし」 < *āt-ke。これに対応する東スラヴ語形は аче(ачи) であるが、年代記では多く оже < *i̯o-ge が用いられる。

2) будущий 「将来の」。本来 быти の未来語幹 буд- から作られた能動形動詞現在形。 < *bhūndonti̯-.

3) възвращатися 「戻る」 < *-wort-ja-。これは母音重挿の欠如によっても、古代スラヴ語の出自が知られる。

4) дъщка 「娘」 < *dhughət' + *ka.

5) еще 「まだ」 < *et-kwe.

6) и-сѣщи 「斬り殺す」 < *-sēk-tēi.

7) обращатися 「向う」 *cf.* 3項。

8) овощь 「野菜」。*worksti- . *cf.* 古高独 wahsan 「育つ」、梵 vakṣayati 「育てる」。

9) пещера 「洞窟」< *pekt- 「炉」 + *erā.

10) плеще 「肩」 < *pletio̯-。*cf.* plẽsti 「広げる」。

11) помощь 「助け」 < *-moghti̯-。*cf.* ゴート mahts 「力」。

12) рещи 「言う」 < *rektēi。*cf.* リト rẽkti「叫ぶ」、拉 raccō 「咆哮する」。

13) свѣщати 「照らす」。< *swoit-i̯-。*cf.* リト švaitýti 「照らす」。

14) хощу, хощеши etc. 「欲する」 < xoti̯ōm etc.

15) нощь 「夜」 < *noghti̯- 及びこれと同根の нощныи.

5. 独立与格句

§27　ラテン語では独立従格句が、ギリシア語では独立属格句及び独立対格句があるが、古代スラヴ語では独立与格句がこれに対応する。これは本来文語的な色彩を帯び、従って教会スラヴ語的な性格を持っていると推定される。これの「述語部分」に能動形動詞現在が用いられている場合について、イストリナは次のように述べている。

「形態論は側面からすれば、独立与格句中の能動形動詞は、大部分の場合に教会スラヴ語の接尾辞を伴っていることが判明する。そのような形はロシア語の接尾辞群を伴ったもの 2 例に対して 20 以上にのぼる。」[15]

筆者の調査では щ を有するもの 21、ч を有するもの 2 である。

東スラヴ語形をもつ例は次の通りである。

11) Приде князь ис Цернигова Новугороду Яропълъкъ Ярославиць на вьрьбницю, **настануцю лѣту** мртьмь мѣсяцем.　(58v6)
「公ヤロポルク・ヤロスラヴィチが、柳の日、三月に年の初まった時に、チェルニゴフからノヴゴロドに到着した。」

12) Приде князь Михаилъ ис Чѣрнигова въ Новърородъ, по велицѣ дни **Фоминѣ недѣли исходяче** ...　(108r4)
「トマスの週の終り、復活祭の日曜日に、ミハイル公がチェルニゴフからノヴゴロドに到着した。」

この 2 例以外のものは、何れも щ をもつ形である。たとえば、

---

[15]Е. С. Истрина, Синтаксическия явления синодальнаго списка 1 Новгородской лѣтописи, *Изв. отд. русс. я. и сл.*, 1921, т. 26, кн. 2, pp. 217–218.

13) **настануцю** въ 7 марта, индикта **лѣту** 15, бѣжя Костянтинъ посадникъ къ Всѣволоду ...(18r5)
「3 月 7 日にインディクトの 15 年が始まったとき、市長官コスチャンチンが、フセヴォロドの許へ奔った。」

§28　独立与格句が能動形動詞過去によって構成される例は、筆者の調査では、およそ 19 例にのぼる。このうち約 6 例が直接に宗教的な文脈に使用されており、ここにおいても独立与格句は古代スラヴ語的性格を有しているといえようが、反面必ずしも宗教的な文脈に使用されているとはいい難いものが多数を占めていることを、見逃す訳にはいかないであろう。この構文の機能が、当初のものとは若干異って来たことを示唆するもののように思われるからである。

宗教的な文脈に使用されていると思われるものには、例えば次のようなものがある。

14) Того же лѣта в Литвѣ бысть мятежь, **богу попущьшю** на нихъ гнѣвъ свои　(140r6)
「この年リトヴァにおいて騒乱があった。神が彼等の上に自らの怒りを下したまうたからである。」

15) **прищьдъшмъ**(*sic*) съ кресты от святыя София къ святому Михаилу и поющим 9 пѣснь, и шибе громъ и мълния, и падоша вси людье, и церкы загореся.　(47v6)
「(人々が)十字架と共に聖ソフィア教会から聖ミハイル教会に到着し、九つ(番目)の讃美歌を歌っている時に、雷鳴と稲妻が落ち、すべての人々が倒れて教会が燃えはじめた。」

§29　これに対して、宗教的な文脈を考えられないものは、たとえば、

16) тъгда **помьрзъшю озѣру** и **стоявшю** 3 дни, и въздре угъ вѣтръ, изламавъ, вънесе все въ Вълхово, и въздрѣ 9 городьнь великаго моста ...(106v10)
「その時湖が凍り、3 日間そのままであったが、南風が起こり(氷を)こわしてすべてをヴォルホフ河に運び込んだ。それで大橋の橋桁が九つこわれた。」

17) **съступившема** бо **ся полкома обѣма**, бысть сѣча зла (159r9)
「両方の軍勢が衝突して、烈しい斬合いになった。」

以上の外、被動形動詞現在の形が 1 例ある。

18) **ведома** же **има** слепома и гньющема очима, и яко доидоста Смольньска и придоста на Смядино въ церковь святую мученику Бориса и Глѣба, и ту абие съпостиже я божия благодать ...и ту прозрѣста (41v9)
「彼等二人が盲い、爛れた両眼をして人に連れられ、スモレンスクに至り、スミャヂノの聖殉教者ボリス及びグレブの教会に入った。そこで突然彼等に神の恩寵が臨み、.....両眼が見えるようになった。」

例 17) 及び 18) が、当時既に口語では用いられなくなっていた双数形をもってあらわれ、更に 18) では宗教的な文脈にあらわれていることは、先に述べた独立与格句の本来の機能と関係があると思われる。

また以上の調査から被動形動詞過去によって構成される独立与格句がこの時代に殆んど知られていなかったことが判明する。これはラテン語の独立従格句と最も異なるところである。

6. 古代スラヴ語要素の相互関係

§30　これまで述べてきた個々の古代スラヴ語要素は、多くの場合単独であらわれるのではなく、他の要素に相伴われて使用されていると言える。これらの要素は全体として一つの体系をなし、それによって一定の文体的効果をもたらすと考えられるのである。

もしそうとすれば、これらの要素の相互関係はどのようなものであるか、が問題となろう。そこで若干の特徴的な古代スラヴ語要素が具体的にどのような現われ方をしているかを調査してみることにする。すなわち羊皮紙の表面 recto と裏面 verso を別々にして各面毎に古代スラヴ語要素をプロットするのである。

このようにしてみれば、多くの要素が重なってあらわれるいくつかの区間が存在していることがわかる。

その最も著るしいものとして、たとえば 137r から 147v までの区間がある。これはテクストでは 6767(1259) 年から 6778(1270) 年までの区間である。1259 年はノヴゴロドにタタールが来たったことを契機に民衆の間に動揺の生じたこと、また 1262 年にはノヴゴロド軍がユリエフの町を攻略したこと、1263 年はオレクサンドル公がタタールの許から帰って没したこと、またリトヴァに騒擾のあったこと、などが記されている。1265 年及び 1266 年にもリトヴァ騒乱の記事がみえる。

古代スラヴ語要素の集積が最も著るしい 145r から 147v の箇所は、1268 年のノヴゴロ軍の不幸な遠征についての記事である。

§31　次いで古代スラヴ語要素の集積が著るしい 121v から 127v の区間は、6746 (1238) 年から 6748(1240) 年の半ばまでの部分にあたり、その内容は、1238 年の頃がタタールの

リャザン攻略についての記事、1240年の項がスヴェイ族(スウェーデン人)の来襲の記事である。この年の記事の後半部はネムツィ族(ドイツ人)がイズボルスクを攻略し、プスコフ軍が出撃してこれと戦った事が述べられているが、この部分は上述の区間から外れている。

§32　次に集積の著るしいのは、109r から114r までの区間である。これは6737 (1231)年までの記事に当る。1229 年のこの部分はミハイル公がチェルニゴフに行ったことを、また1230 年はノヴゴロドに騒乱があったことを誌している。

また 156v から 163v の区間は 6819(1311)年から 6833(1325)年までに当る。

1311 年の項はノヴゴロド軍のエミ族襲撃及びノヴゴロドの火事の記事であり、1314 年の項はノヴゴロド軍のヴォルガ遠征の記事、更に 1315 年以降はタタールと結んだミハイル公との戦いをそれぞれ叙している。

一方 64v から 71v までの区間は 6712(1204)年の項にあたるが、これはビザンチンの帝位をめぐる内紛の記事であり、従来ギリシア語資料の翻訳がその底にあると考えられている部分である。

§33　このようにしてみれば、古代スラヴ語要素は、大きい文脈で考えれば、戦いや騒擾の記事に多いことが判明するが、細かい文脈でみれば、これは依然として宗教的な色彩の強い部分にあらわれることが多い。このような、いわば大文脈と小文脈の内容の矛盾が、この期の古代スラヴ語要素の使用を特徴づけるもののように思われる。

なぜこのようなことが生じたのかを知るために、少し実際の用例に立ち入ってみることにしたい。

まず古代スラヴ語要素の集積度が最も高いと思われる 145r～146v の区間をみれば、ここにはリトヴァのチュヂ族の攻撃の後のネミツ族(ドイツ人)との戦いにおいて、ノヴゴロド軍が敗れ、多くの死者を出したこと及びノヴゴロド軍が攻撃に転じた事が記され、記者の注釈がある。

19) Исаия пророка, **глаголюща, аще хощете** послушати мене, благая земная снѣсте: **аще** ли не **хощете**, ни послушаете мене, оружие вы поыасть, и тако поженеть единъ 100 васъ, а от ста побѣгнет 1000 васъ. Мы же ту страсть видѣвъше, ни худѣ покаемся грѣхъ своихъ, но горше быхомъ на зло, братъ брата **хотяще** снѣсти завистию и другъ друга, крестъ **целующе** и пакы **преступающе**, а не **вѣдуще**, кака есть сила крестная: крестомь бо побѣжены бывають силы бѣсовьскыя, крестъ княземъ пособить въ бранехъ, крестомъ огражаеми вѣрнии людие побѣжають супротивныя: иже бо крестъ преступають, то сдѣ казнь приимають, и на ономь вѣцѣ муку вѣчную. Мы же на **преднее**

възвратимся. Бывшю бо **великому тому снятию** и добрымъ мужемъ **главами** своими **покывающе** за святую Софию, *милосердыи* господь посла милость свою въскорѣ, не хотя смерти *грѣшнику* до конца, кажа нас и *пакы* милуя, **отврати** *ярость* свою отъ нас, и призрѣ *милосердныимь* окомь: силою креста честнаго и **помощью** святыя Софья, молитвами святыя владычица нашея *Богородица приснодѣвица* Мария и всѣх святыхъ, пособи богъ князю Дмитрию и новгородцемъ ...

(太字は古代スラヴ語要素。斜体のものは形態的特徴はないが、古代スラヴ語要素と考えられているものである。)

「予言者イサヤは言っている。もしお前達が私の言うことを聞くならば、地上の善きものを食するであろう。もし欲することなく、私の言うことを聞かないならば、武器が汝等を喰らうであろう。そして 1 人がお前達の 100 人を切り、100 人によってお前達の 1000 人が滅びるであろう。

私たちはこの恐ろしい事を見ていながら少しも自分達の罪を悔いることなく、更に悪事に向い、兄弟が兄弟を、一人が他人を、そねみによって食いつくし、十字架に口づけしては再び罪を犯す。そして十字架の力がどのようなものであるのか知らないのである。何故ならば悪魔の力は十字架によって打負かされるものであるし、十字架が戦いにおいて公達を助ける。十字架によって信仰ある人は護られ、敵をうち負かす。十字架にそむく者はここで罰を受け、次の世では永遠の苦しみを受ける。

ところで私たちは以前の事に戻ろう。大きなその会戦があり、善き人々が自分達の生命を聖ソフィアのために横たえ、仁慈なる主は罪人に最後まで死を与えることを望まずに、間もなくみずからのめぐみを下したまい、私達を罰してまたあわれみ、みずからの怒りを私達から除き、いつくしみの眼で見給う。聖なる十字架の力と聖ソフィアの助け、私達の聖なる永遠の処女マリア及びすべての聖人の祈りによって、神はドミトリー公とノヴゴロドの人々を助けたまい .....」

§34　次に 123r の部分ではタタールがリャザンを攻撃して町を占領して多くの人々を殺したことが記され、次のような年代記者の言葉がある。

「兄弟達よ、このことに泣かぬものがあろうか。生残った私たちのうちの誰が、この苦しい、あらぶる死を受けた時に。私たちもこれを見て怖れ、自分達の罪を夜も昼もため息と共に悲しむのである。私達は昼も夜も財産と兄弟達の憎悪を思って溜息をつくのである。しかし私達は次のことにもどろう。その時リャザンが神を知らぬ、異教のタタールによって占領されたが、多くのキリスト教徒の血を流す者達がヴラヂミリに向った .....」

更に 125r ～ 125v の区間では、タタールのノヴゴロドへの来襲について誌し、次のように述べている。

「兄弟達よ父達よ子等よ、ルシの全土に対する神のこの (*sc.* 罰を) 下し給うのを見て、誰が (悲しまないものがあろうか — 異本)。私達の罪の故に神は私達に異教の民を向け給うたのである。みずからの怒りによって神は異民族をこの国に向けられ、そのことによって、彼等が打ち負かされた時に、神を思い出すのである .....」

§35　次に 113v ～ 114r の区間には、ノヴゴロドの大飢饉についての記事がある。この場合は以上に述べたのと異なり、直接に宗教的な文脈とは考えられない文脈に、古代スラヴ語要素が多用されている。

「私達は以前のこと、その春の苦い、悲惨な記憶に戻ろう。私達に神から下された罰について、何を言い、何を語るべきであろうか。.....その事を眼のあたりに見た私達は、よりよくなるべきなのに、もっと悪くなった。兄弟は兄弟を憐れむこともせず、父が子を憐れむことも、母が娘を憐れむこともせず、隣人は隣人にパンを割ってやることもしない。私達の間には慈悲がなく、悲惨と不幸が、通りには互に悲しみがあり、家には悲惨さがあり、パンを求めて泣く子ども達が、また別の死につつある子供達がみられた .....」

§36　以上のような古代スラヴ語要素の使用をみれば、若干の共通点がみとめられる。その第一は、ノヴゴロドにとって、あるいは年代記者にとって、極めて好ましくない事件についての記事であるということであり、異教徒がかかわっているか、あるいは神の罰として描かれていることである。更には事件に対して年代記者が深刻な感懐をもっている、いわば情緒の纏綿した記述である。このような情緒性は、この種の記事すべてに共通しているとみられる。

したがってこのような情緒性を古代スラヴ語要素の使用の基本的な条件であるとすれば、これが極めて好ましくない事件についての記事にあらわれ易いのも当然であり、異教徒のもたらした災厄についての記事にあらわれ易いのも、又よく説明することができる。

もしそうとすれば、前述の大文脈と小文脈との間の矛盾も、みかけだけのものであるということになるであろう。

またもしそうとすれば、従来この時代の文体の相違が、記事の題材によって定まる、いわば客観的なものであるとする定説に反して、著者の気分、表現したい感情等によって定まる、いわば主観的なものであるということになるであろう。

ところで表によれば、第 1 の筆蹟の部分では、古代スラヴ語要素の存在が未だ散発的であるのに対して、第 3 の筆蹟の部分では、この種の要素の集積が著るしく、また記事の内容との関連も比較的明瞭である。

第 2 の筆蹟の部分はこれに対して第 1 と第 3 の筆蹟の部分の中間を占めている。これが筆記者の言語の影響であるか否かについては俄かには断定できないが、少くともこれは先に述べた「客観的な文体」が「主観的な文体」に変化していく過程をあらわしているもののように思われる。64v ～ 71v のビザンツの記事に град- の形の著るしい集積がみら

れるのは、この客観的な文体の例であろう。

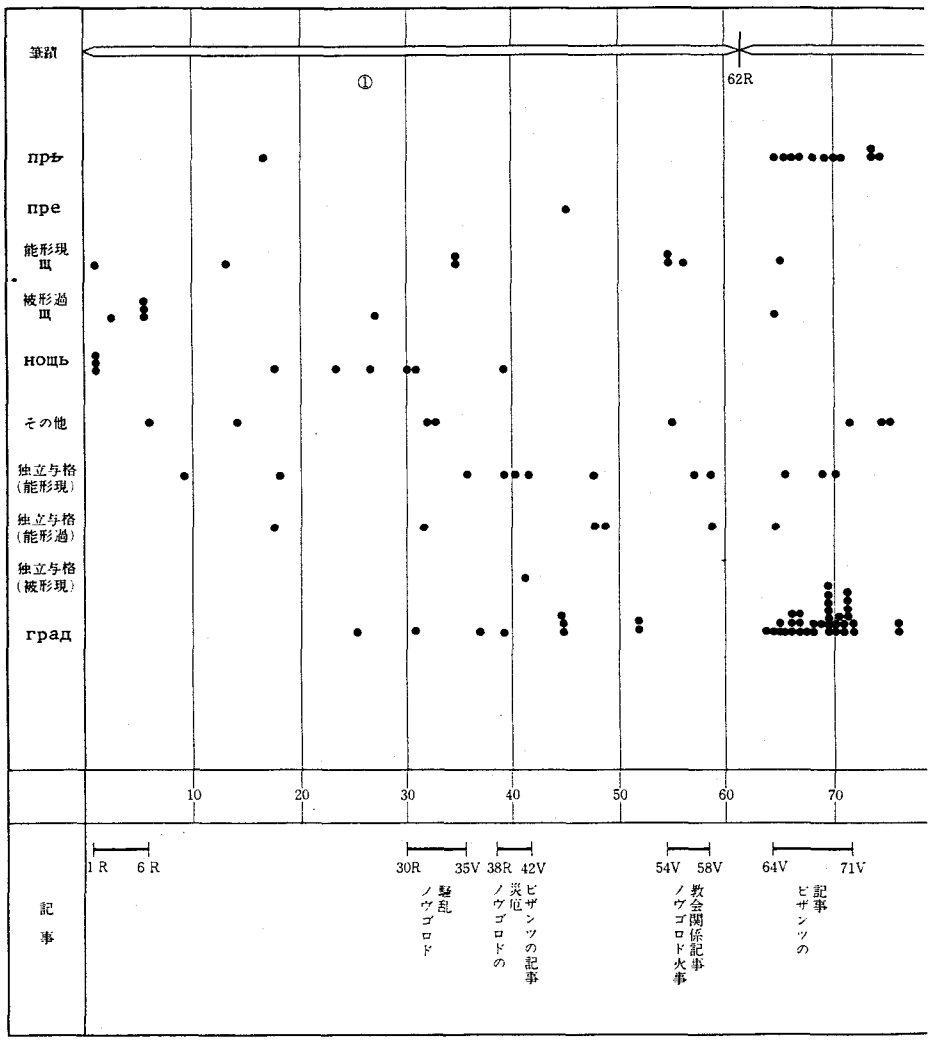
§37　筆蹟との関連で言えば、прѣ- の形と пре- の形がほぼ相補的な分布を示していることが注意を惹く。прѣ- の形は第 1 の筆蹟と第 2 の筆蹟の部分に限られているのに対して、пре- の形は第 2 及第 3 の筆蹟の部分に限定されている。従ってここでも第 2 の筆蹟の部分は、両者が混在し、遷移的である。

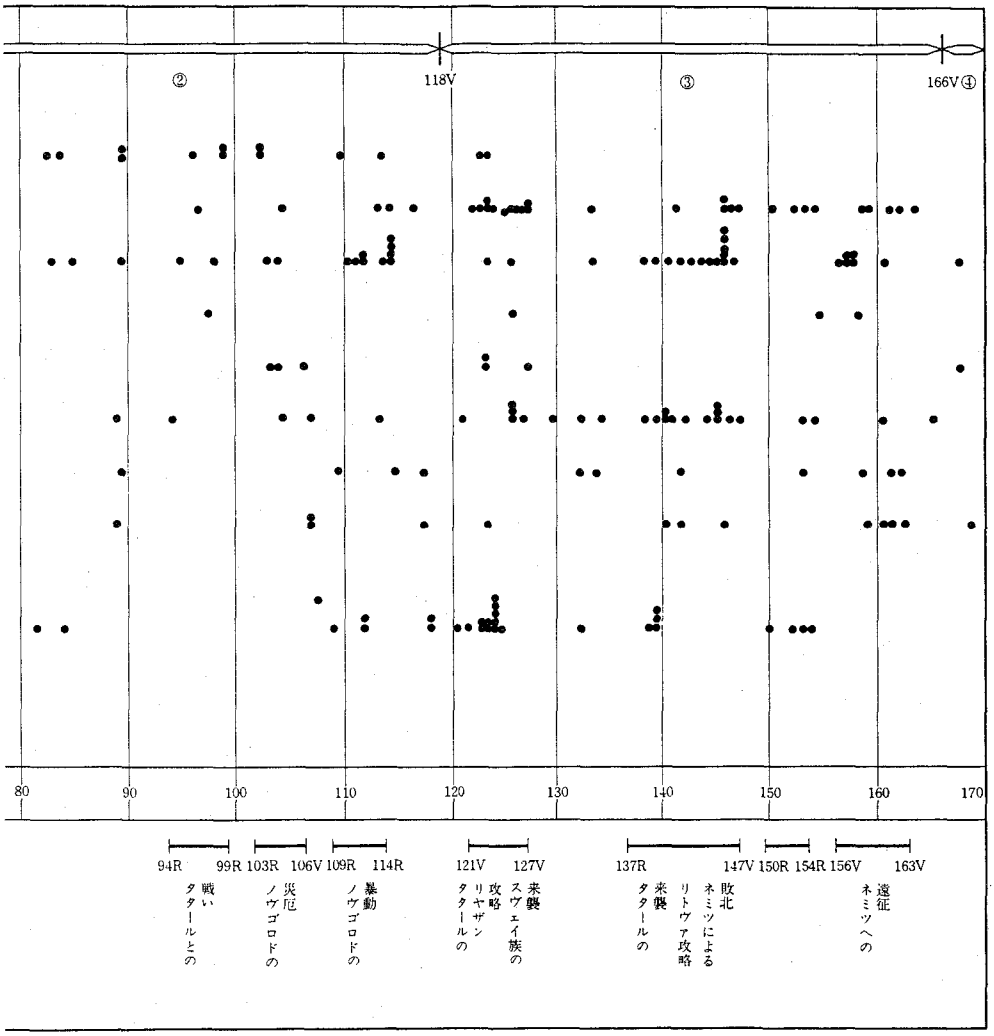
しかし仔細にみれば、第 2 の筆蹟の部分においても、両者が混在するのはその後半の部分、即ち 96r 以降である。このことから第 2 の書記者の用いた資料の境界がこの辺りにあったのではないかと想像される。

もっと多くの語形についても網羅的に調査することによって、あるいはこのことがより明確に示されるかも知れない。もしそうとすれば、この方法は書写生以前の資料の切れ目を明らかにするものであるかも知れず、引いては年代記のテクスト・クリティクに応用することができるかも知れない。

このような、いわばコンピューター・テクスト・クリティクがもし可能ならば、かつてシャフマトフが内容の検討によって推定した年代記の成立の歴史について、客観的に検証する途がひらかれるかも知れない。可能性として特に指摘しておきたい。

付表：教会スラヴ語要素の分布




②
118V
③
166V④
80
90
100
110
120
130
140
150
160
170
94R 99R 戦い タタールとの
103R 106V 災厄 ノヴゴロドの
109R 114R 暴動 ノヴゴロドの
121V 127V 来襲 スヴェイ族の 攻略 リヤザン タタールの
137R 147V 敗北 ネミツによる リトヴァ攻略 来襲 タタールの
150R 154R
156V 163V 遠征 ネミツへの